



大谷健太郎

**「油画を描きたい、
芸術を追求したい・・・
可能性を求めている人が
切磋琢磨していたよ。」**

中学1年のある日、NHKの大河ドラマを観ていてふっと思ったことがあります。「こんなドラマを作りたい」ってね。ドラマの最後に、出演者の名前とかが出てくるでしょ。その最後に“演出”っていう文字が書いてあって、「おっ、これだ！」と思いました。学校で将来の夢を書く機会があったんですが、「演出家になりたい」って書いた記憶があります。まさか将来、実現するとは思わなかったですけど。

出身地は京都府です。両親には、とても厳しく育てられました。小学生の頃、漫画は買ってもらえませんでした。ですから友達の家遊びに行って、そこで漫画を読ませてもらっていました。家に帰ってからは、読んだ漫画の続きを自分で描く。漫画雑誌の作りも研究して、それを真似て月刊誌や週刊誌、書き下ろしなんかを作っていました。誰にも見せないんだから、発行が遅れたってかまわないのに、一人忙しすぎて「連載、抱えきれなくなってる」とか「困ったな」なんてつぶやいてみたり。そんな子供でした。マジンガーZとかも買ってもらえないから、自分で木彫りにして作る。色づけもして、ニスも塗って。木彫りのマジンガーZ…渋いな。

「一人ひとりの思いを育てる」という、あの懐の深さは校風なのかもしれない。

美大には、色々な人たちがいました。油画を描きたい、音楽がやりたい、現代アートを追求したい…。みんな才能があって、その可能性を求めている人たちなわけですよ。でも、田舎の高校生だった自分には、そんな“自分・自分”というのではなくて。何もすることがないから、芝居でも、と思ったわけです。理由？ チャラチャラしてると女の口にモテるかな、と思って。それで、結果的にはサークルに入りました。ここからです、映画との付き合いが始まったのは。

当時、PFF（ぴあフィルムフェスティバル）というのがとても注目を集めていて、僕もそのグランプリ目指して映画を撮ったことがありました。1次審査にも通らなくてね。大学で上映する機会があったんですが、そんな映画は誰も観てくれない。観てくれる人がいないというのは、撮った側の人間にはとても残酷なことなんですよ。それで一気に火がついて、「よし、絶対にグランプリを獲ってやる」と。そこを原点に、僕は大きく変わりました。

映画監督になりたいと思っている人、いますか？ 将来は映画監督にっていう人は、おそらく映画が好きな人に違いないと思います。でもね、映画が好きなだけだと、単なる映画ファンにしか過ぎない。それじゃ映画監督は難しいです。

音楽を聴いたり、小説を読んだり、絵を描いてみたり、描けなかったら見るだけでもいい。面白いと思うことをたくさん見たりやったりすることが大切です。興味をもったり、感じたり、気になったことを調べたりしているプロセスで、人のことや世の中のことをどう観てるか、どう気づくか、そこが肝腎なところなんです。最終的には、ここが映画作りのための糧になってくるんです。映画を観て、映画の勉強をして、それだけで監督というのとは違うんだということを覚えておいてください。

漠然とではなく、具体的に映画を知ることも大事です。たとえばDVDを観て、「編集の変わり目はこういう風に繋がっているんだ」ということを学び取る。印象的な音楽が聴こえてきたら「どの部分から音楽が現れてきて、どこで盛り上がり、どこで消えているんだろう」と耳を傾ける。自分の好きな日本映画のシナリオ本を買ってきて読むのも勉強になります。

僕は、気に入った映画があると、そのシナリオを般若心経のように書き写します。すると、このシーンではこんな風にセリフが書かれてあって、ト書きはこうなっていて、それがこういう風に撮影されているっていうのが分かってくるんです。映画の設計図っていうんでしょうか、組み立ての仕組みみたいなことが理解できるようになります。ぜひ、実行してみてください。

2012 年度

芸術学科紹介パンフレット掲載 卒業生インタビュー全文

映画監督は、何を目指し、何を面白いと思っているのか、その意図をしっかり把握して 1カット1カットを撮っていきます。俳優さんやスタッフに、「こういうことがやりたいんです」、「ここではこういうことを伝えたいんです」と、狙いをきちんと整理した上で伝えます。

映画監督は、映画作りのプロフェッショナルです。が、どこからがプロなのか、その線引きはありません。でも、とにかく映画を作りたい自分がいることが大切です。どこまで映画作りができるか、試したいと思う気持ちを遅くすることが大事なのだと思います。

最後に、映画を芸術だと思わない方がいい。あくまでも娯楽。みんなに楽しんでもらうことが基本です。かつてアメリカに偉大なる映画監督であり、脚本家であり、俳優でもあった男がいました。彼の名前はオーソン・ウェルズ。その彼が残した言葉にこんな言葉があります。「映画は、人類最高のおもちゃだ」。

僕が子供時代に漫画を描いていたのも、木彫りのマジンガーZを作ったのも楽しかったから。そういう意味では、映画というのは僕にとって最高のおもちゃなのだと思います。

おおたにけんたろう・1965年京都府生まれ。1989年多摩美術大学美術学部芸術学科卒業。在学中、映像演出研究会で制作した8ミリ映画『青緑』が1989年のPFFに入賞。1991年『私と他人になった彼は』で3部門受賞。1999年『アベックモンマリ』で劇場用映画デビュー。2011年2月には、菅野美穂主演『ジーン・ワルツ』を公開予定。